

# 目 次

欲望の対象、そして去勢の弁証法(承前)

XIV	口唇期と肛門期における要求と欲望……………	1
XV	口唇的、肛門的、性器的……………	21
XVI	プシユケと去勢コンプレックス……………	37
XVII	象徴 $\Phi$ <small>フイ</small> ……………	59
XVIII	現実的な現前……………	81

今日のエディプス神話

ポール・クロードルのクーフォンテーヌ三部作の注釈

XXV	欲望との関係における不安	249
XXIV	《EIN EINZIGER ZUG》ただ一つの線刻による同一化	225
XXIII	理想の意味の滑動 <small>ずれ</small>	203
	大文字の I と小文字の a	
XXII	構造的分解	179
XXI	パンセの欲望	153
XX	チュルリユールのおぞまし <small>アブジエクシオン</small> さ	127
XIX	シーニユの否 <small>シ</small>	103

	XXVI	影の夢、人間	267
	XXVII	分析家とその喪	285
		解題	305
		訳者覚え書き	309

## XIV 口唇期と肛門期における要求と欲望

精神分析家と欲動

生の開かれた口裂

極からバートナーへ

ブー＝ドゥ＝ザン

逆要求

今日ここで我われの中に紛れ込んで面食らっている人たちのために、簡単な目印をつけておきましょう。

私はまず、いわば愛についての理論を、これまでにないほど厳密な言い方でもう一度提起しようと思いました。しかもプラトンの『饗宴』を基礎に据えて。そして、その注釈で我われが位置づけることができた事柄の内部で、これから私は、転移の位置づけを明確化し始めます。それも、私が今年度予告した方向、つまり転移の主体間の格差と呼んだものへ向けてです。

私がそれによって言いたいのは、「分析において」あい対する二人の主体の位置は決して等価ではないということですからこそ、分析状況と言うことはできず、分析については、ただ偽状況としか言えないのです。

ですから、最近の二回のセミナーで転移の問題に着手する際には、分析家の側から行いました。だからといって私は、逆転移という用語に、一般に受け取られている意味、つまり被分析者との関係において分析家のいわば純化がある種不完全だという意味を与えようというわけではありません。まったく反対に、私は逆転移と言うとき、分析家

は必然的に転移状況に巻き込まれると言おうとしています。だからこそ我われはこの逆転移という不適切な用語に用心しなくてはなりません。実のところ、転移現象を正しく分析するならば、ただ単に転移現象そのものの必然的帰結が問題になっているだけなのです。

私は問題を導入する際にまず、分析実践において逆転移がいま現在、かなり拡大した仕方で捉えられているという事実から行いました。実際、分析家が分析において襲われるいくつかの情動とも呼べるものが、分析状況の目印として、正常のとは言わないまでも、少なくとも規範的な様式となつていとされ、しかもそれは、分析家にとつての情報の一要素であるばかりではなく、分析家が被分析者に対して時に行うコミュニケーションによって、分析家の介入の一要素ともなると考えられています。

私としては、この方法の正当性を取り上げませんでした。しかしそのような方法が〔分析の〕実践に導入しうるものであり、推進しうるものであること、またそれが分析家の共同体の非常に大きな部分に受容され、受け入れられてきたということは認めます。

それだけでも十分に示唆的です。さしあたって我われのとるべき路は、逆転移の用法をそのように理解している理論家たちが、どのようにこの用法を正当化しているか、分析していくことです。

## 1

理論家たちはこの逆転移の用法を、分析家の側の無理解という契機に結びつけることで正当化しています。あたかも、分析家の無理解そのものが判定基準、分水嶺、尾根であるかのように事は進んでいます。つまり、そこでの決定に従って、分析家が、もうひとつ別の様式でのコミュニケーションへと移行せざるをえなくなり、そして患者主体の

分析において自らを定位する際のもうひとつ別の道具へと移行せざるをえなくなる、というのです。

本私がみなさんにお示ししようとしていることは、まさに理解という用語の周りをめぐっています。これによってみなさんは、我われの用語で言うなら主体の要求と欲望との関係に、さらに肉薄することができますでしょう。我われが前面に置き、原理とした事柄を思い出していただきたいと思えます。つまり、分析において重要なのは、患者の欲望の顕われを明るみに出すことにほかならない、ということですが、この原理に戻ることが必然なのだということも我われは示してきました。

我われが理解するとき、我われが理解したと信じるとき、その理解はどこにあるのでしょうか。私は次のように提起しておきます。理解の最も確かな形態、いわば理解の初歩的形態では、何であれ患者主体が我われの前で自慢げに語るものを理解するとき、その理解は、意識の水準では、我われが他者（患者）の要求することに答える術を知っているということによって定義することができます。我われが他者の要求に答えることができると思うその程度に従って、我われは理解しているという感情の中にあるわけです。

しかし、要求について、我われはこうした直接的な着手の仕方よりももう少しよく知っています。我われは、要求は明示的なものではないということを確認に知っています。そればかりか、要求は、単に暗黙のものという以上のものであり、患者にも隠されていて、解釈されなくてはならないもののようなのです。まさにそこに両義性があります。

実際、要求を解釈する際、我われは、我われにとって具体的な言説ディスкурсの平面で、無意識的要求に答えています。まさにそこに協道が、そして罣があります。いずれにせよ、我われはすでにだいたい以前から、我われを捕縛するある前提の方へとじわじわ滑り込んでしまいがちなのです。すなわち、患者主体は我われが答えによって明るみに出すものでいわば納得するはずだ、患者主体は我われの答えに満足するはずだ、という前提の方へです。

しかし、そこにこそいつも抵抗が産み出されることを我われはよく知っています。そして、この抵抗の状況から、

あるいはこの抵抗を我われが形容するその仕方から、さらには我われがこの抵抗を結びつける諸々の審級から、主体に関する分析理論のすべての段階が展開してきました。つまり主体において我われが関わるさまざまな審級の理論のことです。しかし、こうした主体のさまざまな審級が抵抗において持つ役割を否定するわけではありませんが、さらに根元的な点に進むことは可能なのではないのでしょうか。

主体の要求と、それに対してなされる答えとの関係の難しさは、もっと先のまったく根元的な点に位置づけられま  
す。私はみなさんをその点へと導こうとして、話す主体において次の事実から結果してくるものをお示ししました。その事実とは——私が表現した通りに言えば——主体の欲求は要求という隘路を通過しなくてはならない、ということです。そしてその根元的な点では、結果として、話す主体において自然な傾向であるすべてのものは、要求の向こう側とこちら側とに位置づけられなくてはなりません。

向こう側にあるのは、愛の要求です。また、こちら側にあるものとは、つまり我われが欲望と呼ぶものです。そこには、欲望に条件という性格を与えるものがあります。我われはそれを、その欲望が関わる対象つまり小文字の a である部分対象の特異性という点から、欲望の絶対条件と呼んでいます。私はこの対象が、愛の理論に関する基本テキスト『饗宴』において、起源からすでに「アガルマ」として包含されていることをみなさんに示そうとしてきました。私が分析理論における部分対象と同一視したあの「アガルマ」です。

今日は、分析理論における最も根元的なもの、「Trieb」つまり諸欲動とその運命を簡単に振り返ることで、みなさんにそれを改めてはつきりと感じ取っていただきたいと思えます。そうすればそのあと我われは、我われにとつての重要事に関してそれら「諸欲動とその運命」から由来するものを、つまり分析家の立場に関わってくる「Drive 衝迫」を、演繹し導き出すことができるでしょう。

先回、この問題含みの点で終えたことを覚えておられるでしょう。ある学者、まさしく逆転移という主題について

の考えを表明しているある学者が、この点を、彼の言う親心の「drive 衝迫」、親でありたいという欲求、そして修復的「drive 衝迫」、すなわち分析可能なすべての主体に想定される自然な破壊性に対立する欲求、の中に指し示さうとしているからです。

そんなふうには提言するためには大胆さと厚かましさが必要だということはすぐに把握していただけたでしょう。少し注意するだけで、その逆説に気づくことができます。もし分析状況に親心の「drive 衝迫」が現にあるとすれば、どうしてあえて転移の状況などと言う必要があるでしょうか——というのも、分析中の患者主体の面前にいるのは本当に親のような者「だということになってしまう」ではありませんか。もしそうだとすれば、患者主体は、かつてその育成の期間を通して（他の）主体たちに対してとつてきたのと同じ立場に、彼（＝本当に親のような分析家に対して再びはまり込むわけですから、これほど正当なことがあるでしょうか。反復自動症、すなわち患者主体にとってのシニフィアン連鎖を構成する基本的諸状況は、まさにそうした（他の）主体たちをめぐって構築されたのです。

別の言い方をすれば、ここで我われがまっすぐ暗礁へと向かっていること、そしてこの暗礁こそが我われに方向を示すことができるということに、どうして気づかずいられるでしょうか。そこに直接の矛盾があることがわかるでしょう。というのも、我われは同時に、分析で打ち立てられる転移状況が、分析状況の現実と一致していかないとも言うではありませんか——ある人たちは軽率にも、分析状況を、「hic et nunc 今ここ」での医師との関係にこだわって、まったく単純な状況として表現しています。もしその医師がここにおいて親心の「drive 衝迫」で武装するとしたら、たとえ教育的立場から我われが想定するほどにそれが洗練されているとしても、状況に対する患者の正常な反応と、過去の状況の反復として言い表されるすべてのことを区別するものなど絶対に何一つ無くなってしまうことを見取らずにはおれません。

分析状況を明確化するには、少なくともどこかで、これとは逆の要請を立てるより他に手段はありません。たとえ

ば『快原理の彼岸』の第三章をご覧ください。フロイトは、分析において問題となる連関を再検討するとき、想起、再現と、反復自動症つまり「Wiederholungszwang 反復強迫」とをもちろん区別し、反復自動症を、分析における想起という狙いの半ば失敗、必然的失敗と見なしています。フロイトはさらに、反復の機能を自我の構造の仕業に帰してさえます。ただしこれは、彼の理論的洗練のこの段階において、フロイトが自我の審級を大部分無意識的なものとして基礎づけようと試みていたときだったからです。反復機能のすべてを自我構造の仕業に帰そうとしたわけでないことは確かです。というのは、論文全体が、反復にはある余白があること、そしてその余白が最も重要な部分であることを示すために書かれているからです。反復は、自我の防衛のせいで起こるものとされており、一方抑圧された想起は分析操作の真の終極<sup>テルム</sup>、最終項であり、おそらくはこの段階ではまだ接近不能と見なされていました。

想起の最終的な狙いは、抵抗に出会います。この抵抗は自我の無意識的機能に位置づけられます。理論的洗練をこのように続けながら、フロイトは次のように言っています。「我われはこの段階を通らなければならない。規則上、医師は被分析者にこの相<sup>ファイズ</sup>を免除してやるわけにはいかない。むしろ医師は被分析者に忘却された人生のある断片を再び生きさせておくべきである。医師はこれに心を配らねばならない、なぜなら、ある程度の「Überlegenheit 優位性」、上位性が保たれていて、これによって、見かけの現実つまり「die anscheinende Realität」はつねに、再び忘却された過去の反映、鏡の効果として主体によって認識されるであろう」と。

この「Überlegenheit」の強調が、なんと勝手に誤った解釈を招いてきたことでしょうか。これをめぐって、いわゆる自我の健康な部分との同盟という理論の全体が打ち立てられたのです。しかし、先ほどの頁には、それに類したことは何も書かれていません。途中〔正確に読めば〕みなさんの前に現れるはずであったこと、すなわちこの「Überlegenheit 優位性」がいわば中立で、〔医師と患者の〕どちら側のものでもないという性格を、強調しておきましょう。どちらにこの上位性はあるのでしょうか。冷静な考えを失わない医師——そうあってほしいものですが——の側に

あると解するべきでしょうか。あるいは患者の側でしょうか。

フランス語訳は、さまざま(学派の)後援のもとになされた他の多くの訳と同じ程度にまずいものであって、奇妙に訳されています——「患者がある程度の平静な優越感を保つということに気を配っておきさえすればよい」。テキストにはそのようなことは何も書かれていません——「これによって、結局患者は、自身が再現したことの現実性は見かけにすぎないことを確認することができます」。

先の「Überlegenheit 優位性」は、おそらく要請されてよいものなのかもしれませんが、「他の」さまざまな考え方よりもはるかに厳密な仕方では位置づけられるべきものです。私が言っているのは、治療において反復されることの現時点での発散と、完璧に既知のこととして伝えられる状況とを、比較検討していると主張するような考え方のことです。

ですから、我われとしては、我われが解釈において着手するような患者の諸々の相、要求、要請を検討することから再出発しましょう。そして、いわゆるリビドーのさまざまな相のいわゆる通時態を辿りながら、まずは最も単純な要求、我われが実にしばしば参照する要求、すなわち口唇的要求から始めることにしましょう。

## 2

口唇的要求とは何でしょうか。それは授乳エイトル、ユグされたいという要求です。「この要求は」誰に、あるいは何に向けられているのでしょうか。口唇的要求は、聞いている〈他者〉に向けられています。要求の言表行為エフシヤフイのこの初期の水準においては、この〈他者〉を、まさしく我われが〈他者〉の場と呼ぶものと定めることができます。〈他者〉オートル || 人びとオン、これを私をあえて「オートロン Autron」と呼びますが、これは物理学で馴染みの言葉と我われの呼び方との韻を踏んだものです。かくして、授乳されたいという要求は、この抽象的〈オートロン〉に対して、主体によって、程度の差はあれ主

体自身の知らぬうちに、差し向けられています。

要求全体は、それがパロールであるという事実からして、他者から逆転した答えを求めるような形で構造化されようとする、と我われは言いました。要求は、その構造からして、ある種の反転に従った、それ自体の転置形を喚起します。シニフィアンの構造からして、授乳されたいという要求に、〈他者〉の場すなわち〈オートロン〉の水準で対応するのは——しかもこの要求と論理的に同時であると言いうる仕方に対応するのは——授乳に身を任せたいという要求です。

我われはそのことを経験の中でよく知っています。つまりそれは、虚構の対話から洗練された理論的産物ではありません。これはまさに、一見厳密に相補的な仕方で円環をなし閉じているように見える母子関係に少しでも葛藤が勃発するたびに生じることです。授乳されたいという要求に、見かけ上、授乳に身を任せたいという要求よりもうまく答えるものがあるでしょうか。しかし我われは、このふたつの要求の照合の様式そのもののうちに、微妙な「ギャップ」が、裂け目が、裂開が潜んでいることを知っています。そこに不一致が、出会いのあらかじめ定められた失敗が、まったく正常な仕方です、そっと入り込むのです。この失敗は、そこで起こるのがさまざまな性向のぶつかり合いではなく、さまざまな要求のぶつかり合いだという事実からなるものです。

授乳関係において、すなわち授乳されたいという要求と、授乳に身を任せたいという要求との出会いにおいて、勃発する最初の葛藤から次のことが顕やかにになります。すなわち、ある欲望が、この要求をはみ出しているということです——この要求は、その欲望が消えることなしには満足されません。要求をはみ出すこの欲望が消えないように飢えた主体は——授乳されたいという彼の要求に、授乳に身を任せたいという要求が対応しているために——授乳に身を任せはしないのです。いわば、要求として満足されることで欲望として消滅してしまうことを拒否するのです。要求を満足させて枯渇させ潰すことは、欲望を殺すことなしには起こりません。ここから、あらゆる不一致が出てき

ます。その最も活き活きとしたものは、「乳児の」いわゆる心因性食思不振症における、授乳に身を任せることの拒否という不一致です。これを心因性メンタルというものはある程度正当です。

ここに見られるこの状況をお伝えするのに、私を知るかぎり、フランス語の音韻の響きのおかげで可能となる駄洒落を用いるのが最良の方法です。フランス語では、最も原初的なこと、すなわち「お前が欲望だ *tu es le desir*」と他者に告白する際には必然的に、同時に他者に「欲望を殺した *tu le desir*」チュ・エ・ル・デジールと言っていることとなります。すなわち、欲望を殺してくれるよう他者に委譲すること、他者に欲望それ自体を委ねることなしに、前者を言うことはできないのです。主体は要求が満足されないことを望んでいます。このことはあらゆる要求に前提されており、あらゆる要求に固有の一次的両義性です。主体は本性上欲望の保護を目指し、名もなき盲目の欲望の現前を証言するのです。

この欲望、それは何でしょうか。我われはそれを知っています。そして、我われは最も古典的で最も根源的な仕方でのこの問いに答えることができます。口唇的要求は飢えの満足とは違った意味を持っています。それは性的要求です。口唇的要求はその根底において、フロイトが『性理論三篇』以来述べているように、カニバリズムです。そしてカニバリズムは性的な意味を持っています。フロイトが我われに思い出させたように——フロイトの初期の定式化では覆い隠されていますが——摂食ス・スリールすることは、人間にとっては（他者）の善意に結びついていますし、その関係には極性があるのです。

また次のような言い方もあります。すなわち、原始的主体は、（他者）の善意のパンだけを摂食ス・スリールすべきではなく、まさに自分に授乳してくれる人の身体をも摂食すべきなのです。というのも、率直に言わねばなりません——性的関係とは、（他者）との関係を身体同士の合一ユニオンへと導くものことだからです。そして、最も根元的な合一とは、起源における吸収という合一です。ここにカニバリズムの地平が姿を現し、目指されるのです。カニバリズムこそが、口唇期を、分析理論においてそのものとして特徴づけています。

ここで何が問題なのかよく見てみましょう。私は起源から始めることで、事態を厄介な方の端から取り上げました。しかし、現実的発達において物事がどのように組み上げられるのかは、むしろつねに後ろ向きに、廻行的に見いだすべきことです。

みなさんもご存じのように、あるリビドー理論に私は抗議しています。もともと、それは、我われの友人の一人、フランツ・アレクサンダーが掲げたものです。実際彼は、リビドーは余剰エネルギーであるとしました。そして、自己保存に結びついた諸欲求の満足がいったん得られると、この余剰エネルギーが生命体に顕在化するというのです。これは便利な考え方ですが、間違いです。性的リビドーとは、そのようなものではありません。性的リビドーとは、実際まさにひとつの余剰ではありますが、しかしそれは、欲求のいかなる満足をも、それが位置するまさにその箇所、無益なものにしてしまう余剰です。そして、欲求オプゾフツェンに対して——ここでこの表現がオプゾフツェン必要ならばという意味も持つのでまさにうってつけなのですが——性的リビドーは、欲望の機能を保全するために、満足を拒否するのです。

これらのことはまったく明白なことにすぎません。後ろへ引き返して、授乳されたいという要求から再出発してみればわかるように、これはいたる所で裏づけられます。それはまた、次のことからただちに納得いただけることです。すなわち、飢えた口の性向クンクンズが、その同じ口によって、シニフィアン連鎖として表現されるという事実があるだけで、その口が欲望している食べ物ヌリテイルを指し示すという可能性がシニフィアン連鎖に加わることです。どんな食べ物でしょうか。そこから結果する第一のことは、この口が、「その食べ物ではない」と言えるということです。否定、隔たりが、欲望の「私はこれを愛する、他のものではない」が、ここにすでに入ってきます。そして欲望の次元の特殊性がここで勃発するのです。

だからこそ、口唇領域では、解釈に当たって我われはきわめて慎重にならなくてはなりません。というのも、すでに述べたように、この要求は性向クンクンズが打ち立てられるのと同じ点で、同じ器官の水準で、形成されるからです。そして